

- ① 所属名：鶴岡協立リハビリテーション病院(つるおかきょうりつ りはびりてーしょんびょういん)
- ② 協会会員番号：4719
- ③ 氏名：佐藤 浩 (さとう こう)
- ④ 所属県士会：山形県作業療法士会
- ⑤ タイトル：震災ボランティアを経験して
- ⑥ 本文：

前回は震災時の事を話しました。今回は昨年 3 月 19 日に病院のボランティアで松島海岸診療所に行ってみてきたことをお伝えします。

私たちは医師も含めて自ら志願した約 10 名で松島に行きました。

松島は被害の小さなところでした、テレビでみた大船渡のような凄惨な光景ではなかったものの、しかし周辺は泥だらけ、車が壁に垂直に立っているのも見かけました。また後から聞いた話ではスタッフ数名と患者さんが亡くなっていました。

松島診療所に着くとスタッフと思われる人は忙しそうに何かしらの作業していました。早速私達も支援に取りかかり、駐車場や薬局の後片付けとカルテの整理を行いました。診療所の中は泥だらけ、職員は疲弊するような表情を浮かべつつも、ボランティアの私たちに「手伝いに来てくれてありがとう」と頭を下げていました。片付けでは片付けをする道具がなかったり、診療では薬が足りなかったりなど、様々なものが不足していました。とにかく 1 日目大雑把に 1 階の泥をなくしていく、カルテを別の所に運ぶ、駐車場が使えるように泥を掃除する作業をしていました。

2 日目、医師は避難所で診察。その他の人はカルテの移動と薬局の掃除・片付け・カルテの拭き取り(泥)でした。私は午前中がカルテの移動、午後が薬局の片付けでその日で 2 部屋の泥をなんとか掃除しました。その 2 日目の午後、スタッフから物資のお願いでショッキングなことを聞きました。亡くなった方が何人かいるのに、火葬が間に合わなく、家で保管してくださいと言われていて、そのためにドライアイスを用意してくれないかと…。私は用意するように伝えると言ったのですが、それを言う前に、一瞬言葉に詰まりました。

3 日目(最終日)は薬局の部屋の掃除・片付けと、カルテの泥拭き。部屋の掃除・片付けはなんとか終了したのですが、カルテの片付けは私たちが帰るまでの間に終わらせることはできませんでした。カルテの中にはもう泥だらけで使い物にならないものもありました。

病院ボランティアは 3 日間の連休を利用して行きました。この 3 連休に診療所スタッフはずっと仕事をし続けていました。中には地震があってから家に帰っていないという人も…。診療所の専務の話では、地震から 3 日目から 4 日目にはこの地震での対応でストレスを感じ、精神的にまいってしまう人もでてきてしまう人もでてきました。各地からの支援が入るようになって、そのような人は減ってきて良かったと話していました。

昨年をあらわす 1 文字は「絆」でした。この「絆」という文字は昨年のことをただ表すだけではないと思います。これからもこの「絆」が被災者の心を癒す、重要なキーワ

第 23 回東北作業療法学会リレーメッセージ（平成 24 年 2 月 26 日）

ードになるでしょう。今回の被災者の対応だけでなく、超高齢社会で単身世帯が多くなり、無縁社会と叫ばれるこの昨今に、作業療法は、作業を使うことによって絆を深める事が出来るのではないかとふと考えてしまいました。